

第 95 回 歴史リレー講座「東アジアと万葉集と」上野 誠氏 (R4.8.21)

人間の脳は、歌に反応するときと語りに反応するときでは働きが違います。言語の音楽的側面を利用する歌は、時として言葉を超えて人間の心情に訴えます。これには独特のリズムや節回しが特徴的なお経、標語、昔の駅のアナウンスなども含まれます。対して、言語の記号的側面に重点を置くものが語り。歌と語りの双方で成立しているものが『古事記』であり、こういった意味ではオペラも同様でしょう。

様々な階級の人々が詠んだ歌 20 巻 4,516 首を収録する『万葉集』は 8 世紀中葉に成立しました。持統天皇の時代を皮切りに、巻 17 からは大伴家持の歌日記が中心に据えられ、その後は各氏や各家で編まれた歌集(柿本人麻呂歌集や田辺福麻呂歌集などの先行歌集)を少しずつ集成していく形で完成しました。万葉とは万代のことで、永遠の時を祝福するという意味。歌集を読み継いでいく人々を祝福しているという説もあります。さらに、『万葉集』は漢字を漢文として使う部分と、音のみを利用する部分を効果的に使い分けています。当時の人々が漢詩を常に意識しながら、日本語による歌作りを目指したことが窺えます。私たちは最も中国的で、かつ最も日本的な『万葉集』を通して 1300 年前の人たちの「声」を聴いているのです。また、この形式はのちの日本文学の流れに大きな影響を与えました。

『万葉集』の時代は隋と唐の政治権力が強大化し、東アジア全体が緊迫した空気に包まれていました。日本も危機を感じつつも中国の皇帝制度に倣って密かに元号制を採り入れます。そして、現在の元号「令和」は従来の儒教經典に依るものではなく、『万葉集』巻 5 にある梅花宴序の一部「初春令月 氣淑風和」を典拠としています。以下、私の訳で一部を紹介します。天平 2 年(730)の正月に大宰府の師(長官)大伴旅人の屋敷で宴会が開かれました。天気(好い天気)、地気(良い場所)、人気(善い人たち)の三拍子そろった素晴らしい宴。「膝を促けて 觴を飛ばしたり 言は一室の裏に忘れさりて」(心を通わせて酒を酌み交わすうちに、言葉など忘れてしまった)。言葉を弄しているうちは真の交流など叶いません。莫言は中国初のノーベル文学賞作家ですが、その名の意味は「自分には言葉が無い」。これこそが東洋の奥深い教養です。

後半の「淡然として自ら放し、快然として自ら足りぬ」(さっぱりとした気持ちでリラックスし、満ち足りている)状態も東洋の理想です。人間の欲には際限というものがありませんから、「自ら足りぬ」ことで人の輪が生まれます。「このような最高の喜びを表現するには詩文をおいて他にはない。だからみんなで歌を作ろう。昔の中国では舞い散る梅を歌った詩文がある。この大宰府と何ら異なることがあろうか。そうだ、我々は日本人だから園梅を題材にして短歌を詠もうよ」。梅花宴序はこう締めくくっています。

ならば、と大式紀卿は「正月立ち 春の来らば かくしこそ 梅を招きつつ 楽しき終へめ」(こんなにも楽しいのだから、来年はぜひ梅を主賓に招いて催しましょう)と詠み、早々に次回の予約をしました。最後は旅人の歌「我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも」(みんなと楽しく酒を飲んでいるから、散る梅も天から降ってきた雪のように見える)。

彼らは人生が無常であることを承知していました。だからこそ、遊びを大切に、楽しく生きることを最優先させました。時は流れ、ドイツの思想家ハイデッカーもこの東洋思想に影響されました。さらにフランスのサルトル、ポーヴォワールらへ伝播し、やがてアメリカの詩人ギンズバーグは「肩ひじ張らずに生きていこう」と提唱。これがヒッピーの源流となり、イギリスのビートルズ、そしてグループサウンズという形で日本へと戻ってきます。結局のところ、私たちは大きな輪の中で生かされているのではないのでしょうか。

政治の最終的な使命は人々の心に平安をもたらすことです。そのために地域や国が存在します。私たちが心の平安をもって東洋の理想にたどり着くには、足もとを見つめる心と世界に開かれた目が必要です。これが梅花宴序の思想であり、同時に田舎(大宰府)が元気であるべきだという主張も込められています。現代を生きる私たちは、日本の『万葉集』は東アジアの中の『万葉集』でもあることに気付かねばなりません。